



TITLE:

25匹の蛔虫の迷入により惹起せられた急性虫垂炎の1例

AUTHOR(S):

横井, 時敏; 関谷, 幸永; 芦名, 茂; 相原, 軍一

CITATION:

横井, 時敏 ...[et al]. 25匹の蛔虫の迷入により惹起せられた急性虫垂炎の1例. 日本外科宝函 1958, 27(2): 525-527

ISSUE DATE:

1958-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206599>

RIGHT:

25匹の蛔虫の迷入により惹起せられた急性虫垂炎の1例

神戸医大第1外科学教室（主任：藤田 登 教授）

横井 時敏・関谷 幸永・芦名 茂

相原 外科

相 原 軍 一

〔原稿受付：昭和32年11月16日〕

A CASE OF ACUTE APPENDICITIS DUE TO THE ENCROACHING 25 ASCARIS LUMBRICOIDES IN THE LUMEN OF THE VERMIFORME APPENDIX

by

TOKITOSHI YOKOI, YUKINAGA, SEKIYA SHIGERU ASHINA

(Department of Surgery, I., Division Kobe Medical College.)

and

GUNICHI AIHARA

(Aihara Surgical Clinic.)

Encroached ascaris lumbricoides in the lumen of the vermiforme appendix are rather rare, whereas it is often found in the lumen of the bile ducts.

We have experienced a case who had an acute appendicitis due to the encroaching 25 ascaris lumbricoides (11 males, 14 females) in the lumen of the vermiforme appendix which were removed during the operation together with the appendix.

The remaining ascaris lumbricoides were evacuated after the operation by subcutaneous administration of Santonin solution.

Post-operative course in this patient has been satisfactory and was completely asymptomatic when she discharged.

結 言

我々は最近急性虫垂炎の診断のもとに開腹した処、虫垂内に雌雄計25匹の蛔虫が迷入していた珍しい遇発症例を経験したので報告する。

症 例

患者：藤○桐○，25才，女。

現病歴：10月5日夕刻突然腹痛を訴え臍窩部を押さえ強泣し七転八倒した。家人はサバズシによる食当りと考え、下剤、鎮痛剤を服用させたが軽快せず、次第に廻盲部にも激痛を訴える様になり、悪感戦慄の下に38.8℃の発熱を伴い、夜9時頃嘔気と共に、黄色胆

汁調の胃液を嘔吐した。疼痛は仙痛様で右下肢に放散し、歩行は全く困難であつた。月経は規則的で何等の障害もなく、便通は4日前より便秘の状態であつた。其の夜は腹痛の為眠れず、翌朝腹部少々膨満し、来院し、入院した。

既往歴：数ヵ月前より時々腹痛を訴える事があり、サントニン服用で蛔虫を排出した事がある。3年前肺炎に罹患の他は著患を認めない。

家族歴：特記すべきものは無い。

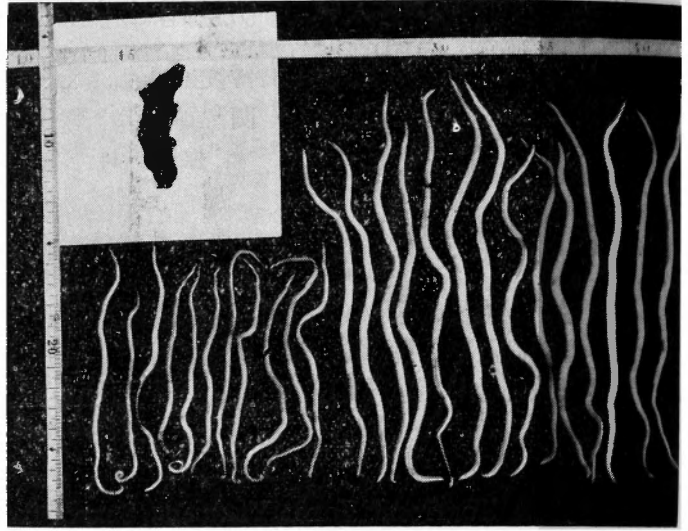
入院時所見：体格栄養は中等度、顔貌は苦悶状、皮膚及び可視粘膜稍々貧血状、黄疸は認めない。脈搏は120、緊張良好、体温38.5℃、瞳孔左右同大、皮膚に異常疹、チアノーゼは認めない。舌は白色苔状稍々乾燥す。

咽喉は正常。胸部は打聴診上特記所見は認めず、呼吸は胸式で少々促迫していた。

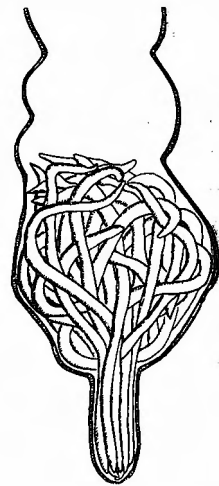
腹部の膨満は軽度に認められ、肝脾腎は触れず打診上鼓音を呈す。蠕動不穏は認めなかったが聴診上グル音を廻盲部に時々証明した。触診すると腹部は全般的に緊張し臍窩部より廻盲部にかけて筋性防禦があり、ブルムベルグ氏症状も陽性で廻盲部には手拳大の腫瘤を触れた。腫瘤は表面平滑で移動性あり、硬度は弾力性硬で圧痛は著明であつた。又マックバーネ、ローゼンスタイン、ロブジグ氏症状等何れも陽性。血液所見は赤血球数350万、白血球数14000であつた。尿は蛋白、ウロビリノーゲン共弱陽性で糖は陰性であつた。便は浣腸により排便せしめたが普通便で血液粘液等は認められなかった。血圧は 135/80 mmHgであつた。以上の所見により急性虫垂炎或いは腸重積症を疑い開腹手術を行った。

手術所見：0.3%ペルカミンS2.0cc腰麻により右直腹筋外縁切開で開腹した。腹膜は正常で腹腔内には早期滲出液の少量の滯溜あり、黄色に濁濁し粘稠であつた。大網膜は廻盲部に遊走し一部虫垂に癒着していた。虫垂は黒褐色の拇指大で乾燥し、一部壊死状を呈し表面は菲薄となりコンドーム状を呈し内容に蛔虫の集団を透視得た。癒着はなく弾力性であつて虫垂を指で諸方向に押すと押された位置のまゝで原形を保っており蛔虫は虫垂先端より虫垂根部、盲腸内部に及びそこで直径約8糎位のボール大の塊状に膨れ上つていた。即ち蛔虫が虫垂に集団的に頭部を先にしてぎつりつまつていたのである。其処で虫垂根部近くの盲腸に小切開を加えその孔より一匹づつピンセットでつまみ出した。蛔虫は尚十二指腸、空腸、廻腸に相当数残存するのを触知し得た。盲腸切開部はレンベルト氏縫合を行い次で虫垂は一部盲腸壁にかゝる所で比較的健康な根部を結紮切断し断端は煙草囊縫合を型の如く行つた。其の後腸骨窩及びダグラス窩を清拭し、ストマイ腹腔内注入を行い腹壁を3層に縫合して手術を終えた。

摘出蛔虫及び虫垂：写真の如く虫垂は黒褐色壊死状で少々萎縮しているが此の中に雄11匹、雌14匹計25匹



写真：虫垂内より摘出した蛔虫。
左上は摘出虫垂。



図：虫垂突起腔内に迷入した蛔虫群。体部及び尾部は盲腸内で塊状をなして居る。

の蛔虫が図の如く頭部を先にして虫垂内に突込んでいたのである。

術後経過：概して良好で何等の異常を認めず術後7日目抜糸し、11日目全治退院した。尚手術翌日よりサントーン注射を行い術後2週間目には検便により全く蛔虫及び蛔虫卵を認めなかった。

排泄した蛔虫数、術後日数及び注射日は表の通りである。

サントニンは10%サントゾール1ccを注射した。

日数	手術	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計	総 計 67
雄	11		4	4	2	3	0	0	0		1	25	
雌	14		7	6	9	1	1	3	1		0	42	
注射日		○		○		○		○		○			

考 按

虫垂内に蛔虫の迷入する例は甚だ稀であつて太田篤氏によると虫垂炎手術の270例中4例で1.5%であり、2例はカタル性虫垂炎、2例は壊疽性でその中の1例は更に穿孔を起していたと報告している。又東京監察医務院の調査によると腹部管腔内臓器への蛔虫迷入は総輸胆管（膵管を含む）、肝管、胆嚢、次で虫垂突起の順で胆汁排泄管系統に比べ虫垂への迷入は割合少ない。蛔虫は横氏のガラス管側枝の実験によつても明ら

かな様に狭い処や側枝へ潜入する習性が強く、その為に管壁運動の異常及び各種疾患が誘発されると述べている。又多数の蛔虫が相当太い消化管に塊状をなして集団棲息し、為に小児では屢々腸閉塞症状を惹起する事もある。

本症例はその集団棲息が盲腸に起り側枝への潜入習性がこれに加つて虫垂突起を充満せしめた状態となつたものである。最初腸重積症を疑わしめる様な臨床症状を呈し、急性腹部症として開腹した症例である。

結 語

蛔虫の迷入により誘発される腹腔内疾患は多種多様あるが虫垂に迷入して虫垂炎を惹起する例は比較的少ない。特に本症の様に25匹の蛔虫が一時に迷入する様な例は頗る稀であると思われ興味をひいたので報告する。

囊 腫 肝 Zystenleber の 2 例

京都大学医学部外科学教室第2講座（主任：青柳安誠教授）

中 村 正 則 ・ 久 山 健

〔原稿受付：昭和32年10月25日〕

TWO CASES OF CYSTIC LIVER

by

MASANORI NAKAMURA and TAKESHI KUYAMA

From the 2nd Surgical Division, Kyoto University Medical School

(Director: Prof. YASUMASA AOYAGI)

We report two cases of cystic liver that were treated in our clinic recently. Cystic liver is not a common recognized malformation. Hosimann reported the first case of cystic liver in 1829, and since then about 200 cases had been recorded in anatomical and clinical findings, but only about 50 cases were in Japanese medical literatures. Most frequently, cysts were found not only in the liver but also in the kidney or pancreas simultaneously. Already, from the view-point of its etiology, various histological and experimental researches were studied by Siegmund, Hippel, Mc Master and others. Observing these reports and studies, it was clarified that there were various types of cystic liver due to congenital and acquired conditions.

Case 1: A woman, aged 47, was admitted to our clinic in July of 1957. Since March of 1955, she discovered a painless tumor in her hypogastric region, but she underwent no treatment for this tumor because she suffered no other sym-